



東北ヘルプニュースレター

2024年クリスマス号

巻頭言

(1ページ)

「3.11」から「能登」を / 「能登」から「3.11」を

「復興」を目指して

(2~14ページ)

インタビュー：3.11 から続く「令和遣欧使節」の旅

2024年11月の実践宣証会議

(15~18ページ)

報告：「ソーカワ事件」を巡って

FCC 放射能問題学習会から、

科学についての市民的責任へ

(19~29ページ)

会計報告

(30ページ)



巻頭言

「3.11」から「能登」を／「能登」から「3.11」を

「2024年クリスマス号」のニュースレターは、(1)「復興」の大きな可能性を体現する一つの活動と、(2)「復旧」もままならないフクシマ（東京電力による原子力被災地全域）の「見えなくなっている・見えなくされている」現実と、(3)そして「被災後の日常」に疲労する津波被災地の今を、お伝えするものとなりました。

2024年は「能登震災・豪雨水害」の年となりました。東北ヘルプは1月・5月・11月に5回、現地へ関係者を送り、現状を確認しつつ支援活動に関わりました。予定では、12月末にも、YMCA関係者との連携の中で、能登へ向かう予定です。

「能登」の現場では、「3.11」の記憶が、次々と、よみがえります。そして、「能登」と「3.11」との違いにも、敏感になります。

「3.11」との違いは、何よりも「人数」にあります。やはり、日本国政府が補正予算を組まずに「予備費」だけで対応している、という事なのでしょう。工事関係者の人数が、圧倒的に不足していると、現地では実感されます。その中で、しかし、東北ヘルプのように、例えばキリスト教では「能登ヘルプ」が、また、神道では「重蔵神社」が、地域に寄り添い、行政の限界の先に空いた欠損を埋めて、地域と支援者をつないでいる。そうした能登の現場にも、私たちは立ち会いました。「3.11」の経験は、決して消えていない。現場の困難に圧倒されながら、そう、はっきりと感じています。



2024年11月24日 石川県志賀町にて

数回、能登の現場に立って、ようやく気付くことがあります。「原発」のことは、そのひとつです。

能登半島には「北陸電力株式会社 志賀原子力発電所」があります。その隣町に、「3.11」以来の仲間が管理するボランティアセンターがあります。そこには「外食のお店」「お風呂屋さん」「簡単な宿泊施設」が林立しています。「あ、これが、たとえば浪江町の、原発事故前の風景なのだ！」と、はっとさせられます。そして、原発近くに立つ「原子力看板」――「3.11」の課題は、現在進行形であることを、「能登」に教えられた思いです。

「3.11」から「能登」が見える。「能登」から「3.11」が見える。そうした循環の中で、ようやく、被災者を少しでも支援できる可能性が残される。そんなことを思っています。その可能性は、持続の中にだけ、残されます。皆様のご支援の、どんなにありがたきことか、痛感している2024年末です。

今回も、ニュースレターをお届けいたします。被災地を全国と・未来とつなぐ働きを、この冊子が担うことができますように――そう、神様に祈りつつ、お届けいたします。

(2024年11月27日 川上直哉 記)

「復興」を目指して

インタビュー：3.11 から続く「令和遣欧使節」の旅

私たちは、ずっと、「復興」という言葉の矛盾に向き合ってきました。

「復旧」と「復興」は、違います。「3.11」の被災地は、そもそも、少子高齢過疎の現場だったのです。その元の状態に「復旧」しても、未来は拓けない。では、どうするか。

「復興」と称して、東京の会議室で構想された未来を押し付けられることが、実にたくさん起こりました。その現場に立ち、その現実に傷つく人と出会う度に、私たちは、「ここは東北なのだ」と、歴史を思い出しました。

東北の歴史とは何でしょうか。それは戦争と敗戦と植民地化の歴史です。

- **150年前**、「戊辰戦争」がありました。その戦争で東北の人々は大敗し、東北全域が明治政府の植民地となりました。土地柄に合わない「米作」を全面的に押し込まれ、大日本帝国の近代化・工業化のための食料生産基地とされました。
- **420年前**、「奥州仕置」と呼ばれる出来事がありました。天下人となった人が、一方的に支配者を入れ替えて来た。400 年ほど続いたその土地の支配者(葛西氏、といいました)は滅ぼされ、反対する者は一揆し武装蜂起しましたが、皆殺しにされました。そうして古代からの荘園制度は完全に終焉し、西国風の新しい封建制度が東北にも貫徹されるようになりました。
- **900年前**、「奥州合戦」と呼ばれる戦争がありました。貴族との権力闘争に西国で勝利した武士が、東北にあった独立政権(奥州藤原氏と呼ばれています)を滅ぼして、鎌倉から新しい武家社会を作り始め、流通に基礎づけられた新しい経済を確立しました。関東の武士たちが東北の土地を分け合い、支配することになりました。(今でも「千葉」「佐藤」といった苗字に関東の地名が残されています)。
- **1250年前**、東北では 38 年に及ぶ独立戦争が起こりました。今から 1220 年前に、日本列島で初めて「黄金」が見つかり、西国の植民地経営が本格化し、もともと東北に住んでいた人々の怒りが爆発した出来事でした。38 年も続いた独立戦争の結果、東北は「日本」の一部に作り変えられたのでした。

千年余にわたる歴史の重みが、今、「復興」の現実として、はっきり感じられます。その歴史の中で、東北の人々は、決して諦めることなく、何度でも立ち上がり、時に激しく戦い、時に奥歯を噛みしめながら、何度でもやり直してきた。

原発と津波の被災地の各地を広く回り、被災された方々と出会いながら、私たちはその歴史を新しく見てきました。そしてようやく、

「復興とは、何か——。

復興とは、つまり、

震災前に忘れていた歴史を掘り起こし、

その歴史を活かして未来を拓くことだ」

と、確信しました。東北ヘルプのニュースレターは、その具体的な実例を報告する場となって来たと思います。

「令和遣欧使節」という出来事が、2024 年にありました。それは、まさに「復興」への歩みになっていました。仙台・石巻・ニューヨークから、様々な人々が一所になって、「3.11」からの旅を進めました。その全体をリードした音楽家・白田正樹さんをお招きし、仙台 YMCA の清水弘一理事長、東北ヘルプ理事の阿部頌栄牧師と、日本基督教団東北教区センター・エマオで、2024 年 11 月 22 日に、お話を伺いました。

(2024 年 11 月 26 日 川上直哉 記)

「令和遣欧使節」高まる士気 常長子孫ら30人 仙台で結団式

支倉常長ら慶長遣欧使節団のスペイン到着410年を記念し、スペインとイタリアで一行の足跡をたどる「令和遣欧使節」の結団式が21日、仙台市宮城野区のみやぎNPOプラザであった。公募でメンバーに決まった県民ら約30人が参加し、両国との文化交流などを育む狙いを確認した。

団長の支倉常長家14代当主、支倉正隆さん(56)＝兵庫県尼崎市＝は「集まってくれた皆さんと一緒に現地に行けるのは、常長の子孫としては大変名誉なこと」と感謝した。

メンバーの佐々木和夫さん(77)＝仙台市太白区＝は「常長に関連する古文書を見るのが楽しみ」と心待ちにする。仙台麻の会の副会長も務めており、「日本の伝統文化を現地の人々にも知ってもらいたい」と話した。

使節は国際交流団体ハボン・ハセクラ後援会(仙台市)が組織した。メンバー約50人が10月16日から9日間の日程で訪ねる。

スペイン南部のコリア・デル・リオ市で、慶長

来月スペイン、イタリア訪問

使節の子孫とされる「ハボン(日本)」姓の人々と交流。令和遣欧使節内に設ける混声合唱団「コロ・はせくら」が同市とイタリア中部のチビタベッキア市で、現地の合唱団と合同コンサートを開く予定。



結団式で参加者にあいさつする支倉さん(左から2人目)

——今日は本当にありがとうございます。みなさま、自己紹介をお願いします。

白田さん

白田正樹と言います。仙台市で生まれ育ちました。まさに、この「エマオ」の近くで、私は生まれ育ったのです。

父はプロ野球の選手もしていたスポーツマンでした。ただ、第二次世界大戦の戦地で怪我をして、自動車販売をしていました。

——御父君は音楽家ではなかったのですね。

白田さん

はい。それでも、私の姉は宮城学院の音楽科でピアノを学んでいましたし、兄は仙台でたいへん有名な先生からバイオリンを学んでいました。私にも、母は何か習わせようとしたようですが、私は・・・そうですね、家にあったピアノをいじっている程度でした。それでも、仙台第二高等学校の合唱団に入りますと、どうしたことか、すぐ指揮者をするように言われました。それ以来、半世紀以上、合唱を中心に音楽活動をしています。東北大学から川崎重工、そして約 50 年前にニューヨークに拠点を持ちましたが、学生をしても、サラリーマンをしても、いつも何か、合唱の指揮・編曲・音楽監督などをしてきました。

清水さん

YMCA運動を推進するクラブがあります。「ワイズメンズクラブ」と言います。2011年の震災の時、全国・全世界のYMCA・ワイズメンズクラブの支援が東北に届きました。その受け入れのために、私は仲間と共に、あの大地震発災から 5 年後に、石巻にクラブを作りました。そのクラブの活動として、「サン・ファン・パウティスタ復元船保存運動」では、白田さんとご一緒できました。

白田さん

その節は、本当にお世話になりました。

清水さん

いえいえ。とんでもない。私は、その時の白田さんの保存運動に、心からの敬意を覚えたのです。今回またこうしてお会いできました事を、うれしく思っています。

「ワイズメンズクラブ国際協会」は、今、ジュネーブに本部をもって、102年の歴史を積みあげています。76か国の国と地域・約1,600のクラブ・約2.4万人の会員で、全世界で活動しています。もともとは米国のトレド市で「ランチョンボランティア」で始まったものです。音楽活動も盛んで、日本でも、たとえば今月も、2011年から今でもなお続いている東北の被災地への慰問活動として、東京や大阪のクラブの仲間が石巻の福祉施設に集まり「歌声広場」を行っています。

阿部頌栄理事

仙台市の南部にあります教会で、牧師をしています。YMCAでも講師をし、仙台のワイズメンズクラブでボランティア活動をしています。清水さんともよくご一緒させていただいています。

2011年3月18日に仙台キリスト教連合が「東北ヘルプ」を立ち上げた時から、全国・全世界のキリスト教会・団体の支援を受け入れる事務所を、川上さんと一緒に続けています。



インタビューは、日本基督教団東北教区センター・エマオで行いました。

一番手前が川上、時計回りに白田さん、阿部さん、清水さんです。

——「令和遣欧使節」という活動が、2024 年 10 月 16～24 日の 9 日間、行われました。仙台で合唱団を編成し、支倉常長（1571～1622?年）の「慶長遣欧使節」が訪れたスペイン、イタリア、バチカンを旅し、現地の合唱団とコンサートを開いて文化交流をする、という企画でした。使節団長は支倉正隆さん（支倉常長家 14 代当主）が担われ、白田さんが全体を指揮し、また合唱も指揮して、使節団は大きな成果をあげました。

白田さん

今回、仙台で市民合唱団「コロはせくら」を編成できたことは、大きなことでした。川上さんには「合唱団長」をお引き受け頂きました。とても助かりました。

阿部さん

この企画全体の発端は、どんなところにありますか？

白田さん

残念ながら多くの方が忘れてしまって事なのですが、実にたくさん、故郷の宮城から世界に羽ばたいた偉人が出ています。まず、近代では高橋是清がいます。明治以降の日本を代表する政治家ですね。そのほぼ同期に富田鉄之助（1835～1916 年）がいます。戊辰戦争勃発前に私が現在住んでいるニュージャージー州のラトガー大学に留学し、「岩倉遣欧米使節（1871～1873 年）」の米国での活動を成功に導いた俊英で、後に渋沢栄一に匹敵する経済人となりました。この二人の師匠ともいえる玉蟲左太夫（1823-1869）は日本人公人として最初に世界一周を果たした人物です。後に東北の各藩を調停し奥羽越列藩同盟に結び付けた功績は正に薩摩と長州を結び付けた坂本龍馬に匹敵します。そして戊辰戦争敗北で壮絶な死を遂げます。そうした偉人は、たくさんいるのです。しかし、東北の人々は「戊辰戦争」に敗れました。それで、なのでしょう。たくさん偉人が、忘れられてしまっている。その代表が、西欧に派遣された日本初の外交使節（1613～1620 年の慶長遣欧使節）の大使となった支倉常長です。その偉業を再発見することは、まさに、私たちの未来を拓くことだと思っています。これが、まず、基本的な考え方です。

そして、合唱団です。現在仙台を拠点に活動している合唱団「萩」は、私の呼びかけで 2010 年に結成されました。これは、主に私の母校である東北大学男声合唱の OB 関係者に対して「私が主催するニューヨークのカーネギーホールでの日米合唱祭に参加してほしい」と呼びかけたのです。合唱祭は 2011 年 5 月 20 日の予定でした。私が指揮者・音楽監督として結成したニューヨークの混声合唱団「JCH (ジャパン・コーラル・ハーモニー)『とも』」も参加の予定でした。そこに「2011 年 3 月 11 日」が来たのです。

清水さん

当然、「ニューヨークで合唱の公演？——とんでもない！」となりますでしょう。

白田さん

はい。でも、ニューヨークの側は日米合唱祭を「みちのく震災復興支援チャリティコンサート」に切り替え、「ぜひ、ニューヨークに来て元気な歌声を聞かせてほしい」と訴えました。現地で活動するアーティストたちはそれぞれチャリティコンサートをしていましたが、被災地のアーティストが自らニューヨークまで来てチャリティ活動することなどそれまでなかったからです。合唱団「萩」では、大きな議論が起こりました。結果、「今こそ自分たちの歌声を海外に届ける時ではないのか」という意見が大勢を占め、100 人以上のメンバーがニューヨークに来たのです。2011 年の 5 月です。震災後初めての被災地代表ともいえる「民間使節」でした。ニューヨークのみならず全米で大きなニュースになりました。カーネギーホールは満員となり、募金もたくさんお預かりしました。全国放送の 4 大テレビ局 NBC にも呼ばれて、「萩」の指揮者の岡崎光治先生と一緒に 30 分のインタビュー番組に出演したのです。

この「萩」のメンバーから何人かが今回の「コロ・はせくら」に参加してくれました。他は河北新報などで新たに募集した宮城を故郷とするメンバーです。



左は「JCH『とも』」のホームページ。

その冒頭には、

**ジャパン・コーラル・ハーモニー「とも」
のデビューは、東日本大震災直後の
カーネギー大ホールでした。
あの日の感動を胸に、
私たちは歌い続けています。**

と、記されています。

——今回、新しい市民合唱団「コロはせくら」のスペイン・イタリア公演旅行のために、ニューヨークの合唱団「とも」の皆さんも、たくさん、助っ人として駆けつけて下さいました。

白田さん

郷土の偉人を思い出すという「歴史」。そして、合唱団と「3.11」。そこにもう一つ、「ハポンさん」という存在があって、この「令和遣欧使節」は出来上がりました。ここで「3.11」と「歴史」がつながりを持つことになります。

「3.11」の震災の後、スペインで、「支倉常長と慶長遣欧使節」にルーツを持つ人々が、日本を思って集まり、故郷仙台・石巻の復興を願う追悼の俳句を詠んでくださった、というニュースが読売新聞に大きく掲載されました。それを友人で俳人の黛まどか（まゆずみまどか）さんが注目し、ニューヨークにいた私に連絡してくださいました。私は感動し、スペインまで飛んで行きました。そして、「ハポンさん」たちとの繋がりが始まります。

——「ハポン」というのは、スペイン語の「日本」、英語であれば「ジャパン」ですね。

白田さん

はい。スペインには、実にたくさんの「ハポン」という苗字の方がおられるのです。ただ、スペインの結婚の習慣で、2代女性が続くと、3代目からは「ハポン」の苗字を引き継げなくなってしまう。それでも、たとえばコリア・デル・リオ市には「ハポン」の苗字を持っている人が600人以上おられます。直接親しくお話を聞くと、「私も、ハポンの末裔です」という方が、本当に多い。

阿部さん：

歴史の波に揉まれて、日本では忘れられていた慶長遣欧使節の歴史が、スペインでは生きていた。それはすごいことですね。

白田さん

本当にそう思いました。それで、私たちは、コリア・デル・リオ市で活動が続けているハポンさん達の組織である「ハポン・ハセクラ・スペイン協会」をサポートしようという目的で「ハポン・ハセクラ後援会」を作ったのです。私はこの「後援会」の会長をしています。

そうした組織化が進む前から、とにかく私たちは、まず何よりも文化交流を始めました。2013年には「ハポンさん」たちに、仙台と石巻へお越しいただき、「仙台・石巻で慶長遣欧使節団 400 年記念コンサート」を開催しました。そこにはニューヨークから合唱団「とも」も参加しました。そして 2014 年には、合唱団「萩」と「とも」がスペインへ行き、コンサートをしました。その時のことは忘れられません。世界遺産である「アルカサル宮殿」の中庭で、私たちは合唱を披露したのです。そうしたことは「アジア人としては初めて」であるそうです。

そして組織化が進みましてから、被災地・宮城県女川市とスペインのコリア・デル・リオ市とセヴィリア市のサッカーのユースチームの交流戦「ハセクラ・カップ」を、スペインで開催しました。2019年のことでした。そこで大活躍した少年が、今、プロリーグ「ベガルタ仙台」の選手になっています。



ハポン・ハセクラ後援会の note ページに
「ハセクラ・カップ」の報告が掲載されています。
https://note.com/japon_hasekura/n/n14df27412a63

そうして「いよいよ」と展開していた矢先、「コロナ」の大騒動になってしまいました。

清水さん

そのパンデミック騒動の中で、
私たちは「サン・ファン・バウティ
スタ復元船 保存運動」をご一緒
したのでした。


白田さん



サン・ファン号保存を求める世界ネットワーク
(SAVE サンファン世界ネット)
World Network to Save The San Juan Bautista

〒986-0622 宮城県石巻市中央2丁目10-2 新田屋ビル
E-mail save.sanjuan2021@gmail.com

HP Twitter YouTube



白田さんが会長を担ってくださり、
復元船保存運動のネットワークは
世界大に広がりました。

はい。支倉常長の慶長遣欧使節に用いた日本製の巨大木造船「サン・ファン・バウティスタ号」を、今からおよそ 30 年前、石巻で復元し、展示してきました。その復元船を「老朽化」を理由として破碎してしまう。私は義憤を感じました。そして幸いなことに、清水さんをはじめ多くの方々が、同じ思いを共有してくださいました。復元船は残念ながら破碎されてしまいましたが、その思いは、保存を求める人々によるたくさんの署名になって残され、そして、私たちの文化交流事業にも、確かに流れ込んでいるのです。



【TBC 東北放送特集】隠れキリシタンと政宗の関係 <https://www.youtube.com/watch?v=RjXeexZxSw0>

——「文化交流」という民間事業を、「歴史」を掘り起こして、展開する。それが「3.11」の復興となって行く。その最新の企画が「令和遣欧使節」なのですね。

白田さん

文化交流は、とても重要だと思っています。特に「音楽」と「スポーツ」の交流は、子どもたちが一緒にできる。今回も、コリア・デル・リオ市でのコンサートでは、たくさん子どもたちが舞台に立ち、共に歌っていただきました。

今、そうした文化事業を通して、同じ「支倉常長と慶長遣欧使節」の歴史を共有している諸都市をつなぐ。「姉妹都市」という動きは以前からあり、例えば仙台市とアカプルコ市（メキシコ）、石巻市とチビタベッキア市（イタリア）とは姉妹都市となっています。そうした「都市」でつなぐ交流を、さらにつなぐ。「県」や「圏」でつなぐ。そうして「線から面へ」と展開すると、さらに豊かな文化交流が展開できる。そんなことを考えて、「支倉リーグ」を立ち上げたいと思っています。今、私たちは少なくとも「12都市※」を考えています。

※コリア・デル・リオ、エスパルティーナ(ロレト修道院)、セヴィリア、チビタベッキア、アカプルコ、ハバナ、米沢市(生誕地)、川崎町、大郷町、仙台市、石巻市、女川市



「コロナ前」に発表された「支倉リーグ」の第一案「支倉都市同盟案」のリーフレット

この大志の先導役は、コリア・デル・リオ市のモデスト・ゴンザレス市長です。彼のリーダーシップで、今回の「令和遣欧使節」は大成功に終わり、セヴィリア県やチビタベッキア市も公式に「大賛成である。協力する」と発表してくださいました。

——「復興」を行政主導で行えば、どうしても、矛盾と歪みが現場の住民に押し付けられることになります。そうではなく、民間主導であれば、ずっと伸びやかに事柄が動く気がします。

白田さん

確かに、自治体や国の役割は重要です。でも、行政主導の運動の中では、しばしば、民間の動きが止まりがちです。市民ベースで盛り上がり、行政が手伝う、という形が理想だと思っています。そのために、特別な推進力が必要です。

「支倉リーグ」は、400年のロマンを背景に置いています。主導しているのは「ハポンさん」たちです。あの方々は、「侍の子孫」という自負と誇りをお持ちです。「ハポンさん」と出会う時、私たちは、自分たちがずっと忘れていた「何か」を思い出すのです。

歴史的な重みをもった、本当の兄弟愛——こうしたことが、本当のグローバルリズムの中にあるべきではないかと、ニューヨークとスペインそして仙台・石巻・東京を行き来して、痛感しています。つまり、「国際金融資本」と「独裁覇権資本」そして「戦争」が、グローバルリズムの中身になってしまっているのが現実なのです。私たちは、まったく別の可能性を目指したモデルケースとして、世界に問いかけたいと思っていますのです。

阿部さん

その可能性は、本当に、稀少ですね。そうしたものは、ほとんど他にない、と思いました。

白田

それはつまり、「ハポンさん」の存在が大きいのだと思います。「ハポン・ハセクラ・スペイン協会」には、今、たくさんの方が名前を連ねて下さり、実際に30人くらいがアクティブに活動してくださっています。

スペインのコリア・デル・リオ市から
「ハポン」さんたちが仙台を訪問した
際の記念写真。

ハポン・ハセクラ後援会 note から
<https://www.japonhasekura.com/>



清水さん

実は、私の同級生に、支倉家の本家筋の者がおります。今でも親しくしています。お恥ずかしいことです。私も、そうしたつながりを持ちながら、その歴史から深く学ぶことを疎かにしていました。「サン・ファン・バウティスタ復元船」の保存運動と、実際にその破碎の現実に向き合って、やっと、歴史を自分の身近に感じたように思います。白田さんが「保存運動」のリーダーシップをとってくださったことの賜物です。そして、今日、その背景にある大きなお働きを知りました。「3.11」からの復興のために、世界を回って、展開しておられる。そのことを知り、とても力づけられました。

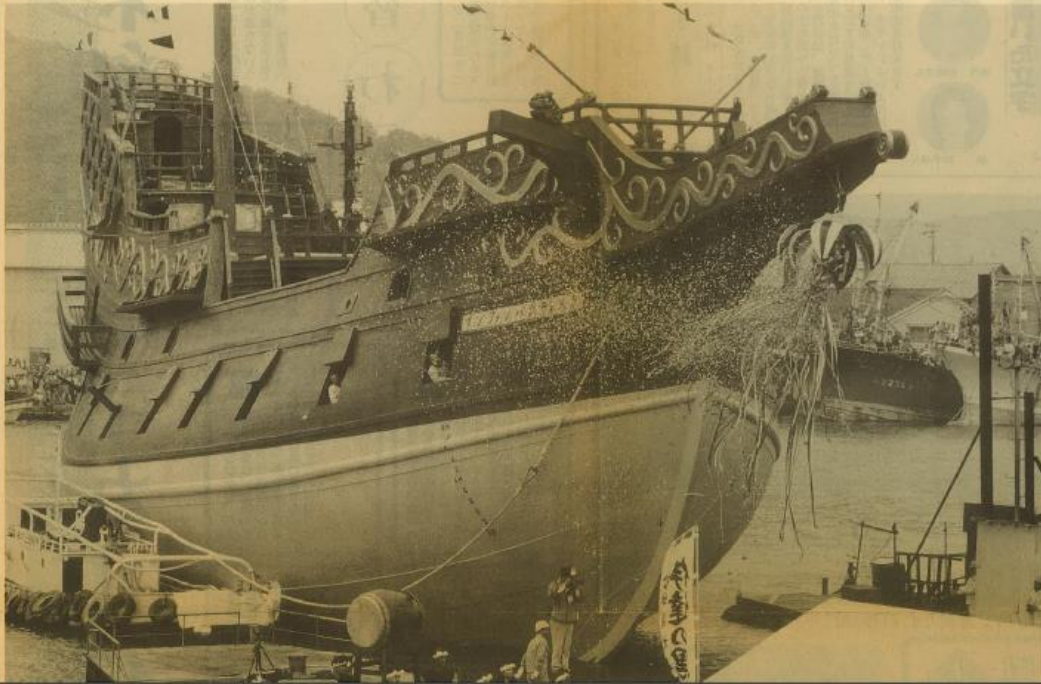
白田さん

歴史を身近にすることは、本当に、人生の力になりますね。私は、窮地に陥った時に、いつも「伊達政宗だったらどうするだろう」と考えます。遣欧使節をスペイン・ローマまで派遣したその度量の大きさは、本当にすごい。あの天下人・家康と互角に政治で渡り合った。その「狸と龍のばかしあい」には、いつも、心躍るドラマを感じます。

清水さん

結果として、「サン・ファン・バウティスタ復元船」は、破碎されてしまいました。でも、今日、その反対運動は決して無駄にならなかった、と思いました。新しい交流が、その悔しくて苦しい記憶も巻き込んで、前進しています。そう考えて、あるいは自分を慰めているのかもしれませんが・・・でも、そう考えて、白田さんに敬意を表します。

「躍進石巻圏」キメ細かく



石巻かほく

三陸河北新報社
〒985 石巻市下町1-1-1
電話(022) 81-1111
FAX (022) 81-1100
発行部数
〒985 石巻市下町1-1-1
三陸河北新報社

宣伝版

◆発行部数◆
(平成5年6月現在)
石巻かほく 四二、〇七五
気仙沼かほく 一六、〇〇〇
金石新報 八、九〇〇

1993年5月発行「石巻かほく」紙 宣伝版

この他にも、多くの新聞が、一面トップで
「サン・ファン・バプティスタ復元船」の完成を伝えました。

阿部さん

私は小学3年生の時に、仙台港で係留されていた「サン・ファン・バウティスタ復元船」の中に入りました。子ども心に「狭い」と思ったことが印象に残っています。つまり、「これで太平洋を渡ったのか」と、驚いたのです。

白田さん

同寸大の復元船の素晴らしさは、「狭い」ことが実感できることです。あの船に「180人」以上が乗り込み、さらに荷物と食料と水、そして家畜まで詰め込んだ。そのリアリティが分かる、復元船は、重要だったのです。

——そうした「復元船の破砕」を経て、今、石巻の慶長遣欧使節ミュージアム「サンファン館」はリニューアルオープンしました。「新型コロナ」を経て、「ハポンさん」を核にした交流も上々の再スタートを切りました。色々な出来事・痛みを巻き込みながら、私たちの「復興」が進む。そんな手ごたえを感じさせて頂きました。今日は本当に、ありがとうございました。

「週刊 NY 生活」紙の電子版 2024年11月28日号に、
「令和遣欧使節」の特集記事が掲載されます。
<https://www.nyseikatsu.com/> 是非、ご覧ください。

2024 年 11 月の実践宣証会議

被災地では、教団教派の壁を乗り越え、さらには「教会の壁」も乗り越えて、私たちは力を合わせる機会を得ました。それは 2011 年の時、そうでした。そして今、2024 年の「能登」でも、そうなっています。

これは、素晴らしいことです。

しかし、それは、長続きしない、かもしれない。

そんな思い・危機感から、一つの会議が生まれ、続いています。東北ヘルプ理事の中澤竜生宣教師が主導され、OM 宣教団のステューブン契子宣教師が事務局をなさり、イエス福音教団宮城教会の大原阿津子牧師が会場を提供して下さい、保守バプテスト同盟や救世軍、そして日本基督教団の牧師が参加しています。いつも大原先生が素晴らしい昼食を用意してくださり、和気あいあいと交流の時間を持ってから、主に「3.11」の被災地での宣教の課題を率直に分かち合う会議を持っています。



この会議は「実践宣証会議」と名付けられています。「宣教」という言葉で見落とされてきた大切なことを、「宣証（せんしょう）」ということばで拾い上げてみたい、という思いが、この会議の名前に込められています。

会議では、少子高齢過疎の現実の中で地域に奉仕するクリスチャンの働きが分かち合われます。そして、その働きの障害・つまづきとなる「心痛む出来事」も、報告され、痛みをみんなで共有しています。そこで「解決」は、まったく出てきません。ただ、その痛みを分かち合い、そして、真剣に祈り、課題を胸に刻む。そうしたことが「実践宣証会議」で、続けられています。

会議はおおよそ「2 か月に一度」行われています。11 月 25 日（月）にも、会議は行われました。「能登」の支援の活動とその課題も、複数、報告されました。そして、南三陸町で今進んでいる問題が、中澤先生から報告されました。ここで、南三陸町の問題を、ご紹介します。中澤先生が、25 日の会議で報告してくださった事柄を、文字にしてくださいました。以下に転載致しますので、是非、お読みください。

(2024 年 11 月 26 日 川上直哉 記)

南三陸町における生活支援員活動と今後の課題

地域支援ネット架け橋 代表 中澤竜生

南三陸町では東日本大震災により甚大な被害を受け、多くの住民が避難を余儀なくされました。震災後、町は避難した住民の安否確認や情報提供を行うための要員として、住民の中から「生活支援員」を募集しました。当初、約 200 名が集まり、学びながらの訓練や報告活動を開始しました。

生活支援員の活動内容

生活支援員は、訪問活動を通じて住民に南三陸町の取り組みや現状を伝えるほか、町長からのメッセージをビデオで共有し、住民の孤立感を軽減する役割を担いました。この活動は、仮設住宅に住む住民にも行き届くよう徹底され、被災された方々が災害公営住宅に転居した後も、続けられました。

しかし、予算の関係で、生活支援員の数は次第に減少し、現在「20 名」となりました。それでもなお、今でも生活支援員は、60 世帯に一つ設置された集会所を拠点として「1 拠点に 2 名ずつ」配置され、人々の見守りを続けています。

生活支援員の仕事内容

生活支援員の仕事内容は多岐にわたり、利用者の日常生活全般をサポートする重要な役割を担っています。

主な業務には食事や入浴、排せつなどの身体介助、衣服の着脱や生活習慣の指導、家事や金銭管理の支援などが含まれます。

また、農耕や園芸、職業訓練の指導を通じて自立を促すほか、利用者やその家族との相談や支援内容の調整も重要な業務の一つです。

生活支援員の給料・年収

生活支援員の給料は、勤務形態や施設の規模によって異なりますが、平均的な月収は常勤で約32万円、非常勤で約11万円とされています。

生活支援員活動の終了とその背景

しかし遂に、この残された「20名」の生活支援員ですら、来年度で打ち切られる予定となりました。その理由は、主に国からの予算が確保されないことにあります。そしてさらに、町全体の過疎化や収入の減少が影響しています。確かに、南三陸町としての財源の限界は、はっきりしています。生活支援員活動の継続は難しい状況にあることは、事実なのです。その上でしかし、その必要もまた、確かにあるのが南三陸町の現状です。

イベントでの議論と課題

この問題に対応するため、南三陸町社会福祉協議会は、一つのイベントを企画しました。「生活支援員制度終了の、その後」を検討するきっかけになればと、10月25日(金)・26日(土)に、フォーラムを開催したのです。

そのフォーラムは「小さな社協のこだわりフォーラム」と名付けられました。フォーラムでは、これまでの生活支援員活動が報告され、その住民との接点の重要性について、多方面から言及されました。また、災害復興住宅地に設けられた集会所や、社協の拠点となっている「結の里」といった場所は、そもそも、生活支援員と住民が交流するように設計されていたこと、そのことが、住民支援に大きな役割を果たしてきたことが、確認されました。

◆小さな町の小さな社会福祉協議会が、被災した地域住民の主体的な関わりを促すために、コミュニティの再生や住民同士のつながりづくりなど、東日本大震災の発生から今まで住民と共に続けてきた数々の取り組みは、被災者支援から地域福祉推進に至る、一連の過程を切れ目なく展開してきた成果といえます。

◆このような私たちの経験は、今後、小規模な市町村での平時の地域福祉・地域づくりの基盤として、それが同時に方が一歩の非常時への備えとして、大いに活かせるのではないのでしょうか。そんな思いを込めて、このフォーラムを開催いたします。

小さな社協のこだわりフォーラム

～平時は非常時！地域が、人が、つながるためにできること～

- 令和6年10月25日(金)～26日(土) **参加無料**
- 会場：南三陸町総合体育館 **申込締切は9月20日まで！**
- ベイサイドアリーナ **申込締切は下記Q&Aより**
- 文化交流ホール

〒988-0725 宮城県本吉郡南三陸町志津川字沼田54番地
公共交流 住居付前棟BRT 南三陸町役場・病院前徒歩4分

主催 **社会福祉法人 南三陸町社会福祉協議会**

共催
南三陸町 住友理工株式会社 地域福祉研究所
有限会社ジオ・プランニング 株式会社日東設計事務所
南三陸町を支えるチーム広島 東京都
後援
宮城復興財団、宮城県、(社)全国社会福祉協議会、(社)中央共同募金会、(社)宮城県社会福祉協議会、(社)福島県社会福祉協議会、(社)石川県社会福祉協議会、(社)宮城県内24市町村社会福祉協議会、(社)宮城県美郷会、(社)美郷町社会福祉協議会、(社)茨城県社会福祉協議会、(社)栃木県社会福祉協議会、(社)大津市社会福祉協議会、(社)宇都宮市社会福祉協議会、(社)群馬県社会福祉協議会、(社)新潟県社会福祉協議会、(社)静岡県社会福祉協議会、合同会社PSCアラス、全国コミュニティサポートセンター、日本福祉大学、日本社会事業大学、東北学院大学、東北福祉大学、南三陸町観光協会、ちよさながら市実行委員会、河北新報社、三陸新報社、毎日新聞仙台支局、読売新聞東北総局、朝日新聞仙台総局、A75仙台放送局、共同通信仙台支社

協力
ほっとバンク(協力店)、311メモリアル伝承館、株式会社行場商店、オーイング菓子工房Ryo、河北新報南三陸販売所

参加お申し込みはこちらから→

事務局 社会福祉法人 南三陸町社会福祉協議会
020-45-1180(代表) 020-45-1180(総務係)
TEL 0220-45-4516(総務係) 0220-29-6452(地域福祉係)
電話申し込み60分

そのフォーラムには、町長をはじめ、南三陸町役場の責任者も出席していました。話し合いが進む中で、「生活支援員がいなくなることで生じる課題」について、パネラーから町に意見を求める場面もありました。しかし、残念ながら、具体的な返答はありませんでした。

フォーラムでは、結局、「次のステップが示されないまま、生活支援員の活動は終了する」ということが確認されました。

今後に向けて、社会福祉協議会や外部支援者の連携、さらに自治会長や民生委員など町民の代表が担う役割が重くなることが確認されました。その中で、私たちは、どのように関わるか。これは、これからの大きな課題となっています。



『河北新報』2024年10月29日

<https://kahoku.news/articles/20241028khn000047.html>

地域の現場で見える課題

特に記憶に残ったことを、一つ記して報告を終えます。ある生活支援員のお話です。その方は「日々の茶話会・集会所を活用した花植えなどの活動を通じ、地域の課題に取り組んできた」と語りました。特に、一人世帯が抱える問題については、民生委員と協力しながら、個人情報に配慮しつつ対応してきたとのこと。こうした取り組みを担う人が、これからいなくなるのかもしれませんが、町内にはたくさんの一人世帯の方がいます。そうした方がたへの支援を、どうすればよいのでしょうか。高齢独居世帯は、広く社会問題となっています。津波の被災地となって復旧した南三陸町では、この問題はいよいよ厳しくなります。



中澤先生ご夫妻

私たちにできる事は何か。神さまに祈りながら、地域の方々との交流を深めながら、日々、模索と挑戦を続けています。

(了)

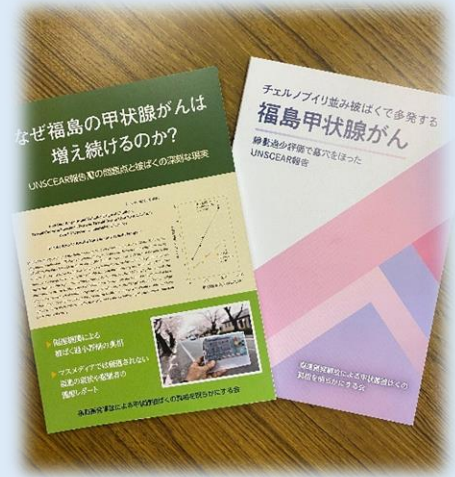
FCC 放射能問題学習会から、科学についての市民的責任へ

報告：「ソーカワ事件」を巡って

東北ヘルプ代表 川上直哉

2024 年夏、二冊の本が、東北ヘルプに届きました。送り主は、加藤聡子（かとう としこ）さんでした。以前、大きな会議で一緒したことがあり、その時のご厚誼を新しくまた、賜ったことでした。

東北ヘルプ代表・川上は怠慢で、瑣事に流されて、その御礼も疎かになっていました。この秋、ようやく時間を得て、賜ったブックレットを拝読し、立冬も過ぎた頃になってようやく、メールでお礼状をお送りしたことでした。（いつも、こうしてご無礼が募ります。たくさんのみなさま、この場を借りて、お詫びをいたします。）



加藤さんは、メールにご返信を下さり、以下のようなお言葉をくださいました。

宗川論文が出て、福島甲状腺がんの多くが被ばくと関係のない通常発症との主張にかなりの方が賛同されないかと、反論投稿、論文の誤り検証に多くの時間をとられています。被ばく影響なしの通常発症は、県立医大も UNSCEAR も言ってこなかった、世界初の問題論文です。これは公衆の被ばく限度が 1 ミリシーベルトに保たれたまま、福島は 20 ミリが適用されると同様の構造です。ご本人は信じて良心的に行動していると信じておられるので…

川上は急ぎ、加藤さんに、上記の意味を詳しく知りたい旨の返信をしました。それは、東北ヘルプ「ニュースレター」2023 年クリスマス号の 27 頁以下（特に 32～33 頁）を思い出したからでした。私たちは「福島県キリスト教連絡会（FCC）放射能問題学習会」で、加藤さんのおっしゃる「宗川論文」に学んでいたのです（次ページにバックナンバーからの切り抜きを掲載します）。おそらく、私たちは、その問題性を理解できていない。そう直感しまして、教えを乞うたのでした。

加藤さんは、お忙しい中にもかかわらず、ご友人の林衛（はやし まもる）さんをご紹介くださいました。私は、いつも学習会でお力をお借りしている井上儀一さんにお声がけし、11 月 20 日の 11 時から 13 時まで、オンラインの会議を持つことができました。

以下に、その概要をお知らせします。かなり、専門的な内容になりますので、オンライン会議参加者各位の自己紹介だけ、インタビュー形式で記し、その下に、「FCC 放射能問題学習会」のみなさまに川上がお送りした報告書を付す形に致します。

それでは、まず「ニュースレター」のバックナンバーからの切り抜きを掲載します。

東北ヘルプ ニュースレター「2023 年 クリスマス号」

自分で考えるために。理解を更新し共有するために。

福島県キリスト教連絡会（FCC）「放射能学習会」で学んでいること

2023年11月15日、Zoomで、3人の方に集まっていただきました。

福島県キリスト教連絡会（FCC）は、原発事故被災地の現場で、「放射能問題学習会」を継続しています。その学習会の意味と、そこで学んでいることについて、中心メンバーにオンラインで集まっていただき、お話しを頂いたことでした。

あの大事故から12年が経ちました。何もわからなかった中から、次第に、たくさんのがわかり始めています。「放射能の影響」だけでなく「私たちの社会」についても、たくさんのが、あの事故をきっかけとして、わかり始めました。

東北ヘルプ代表の川上が、3名の方に、インタビューをいたしました、その記録を以下にご案内します。どうぞ、ゆっくり、お読みいただければと存じます。

(2023年11月21日 川上直哉 記)

東北ヘルプ ニュースレター「2023 年クリスマス号」27頁以下の切り抜き

3 具体例1 「甲状腺がん」をめぐる学習

——それでは、具体的に、学習会の様子をご紹介
いただきましょう。11月も学習会がありましたね。

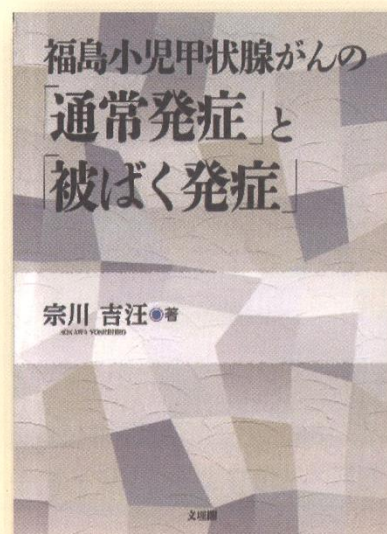
木田さん

はい、私が一冊の本の紹介をし、井上さんが「日独の
比較」を主題とした研究報告をしてくださいました。

——木田先生の紹介くださった本は、
どんな本ですか？

木田さん

『福島小児甲状腺がんの「通常発症」と「被ばく発症」』
というブックレットでした。宗川吉汪(そうかわ よしひろ)



東北ヘルプ ニュースレター「2023 年 クリスマス号」

さんとおっしゃる理学博士が著者です。福島県における小児甲状腺がんの「通常発症」の解析をもとに、原発事故による「被ばく発症」の程度を推定しています。甲状腺がんと被ばくとの因果関係を否定する国・県の姿勢を批判し、すべての患者の救済を訴える本でした。

——この本は、福島県の大規模な甲状腺検査の結果から「甲状腺がん」の発症に「地域差」があることを改めて主張し、そして「原発事故による被ばく由来の甲状腺がん」の発生がどれくらいあったのかを算出したものでした。この「地域差」については、木田先生が、事故当初から注目されていましたね。

木田さん

福島県立医科大学が中心になって行われた甲状腺検査二巡目で、明確な地域差が現れたことは、衝撃的でした。ところが、その後、評価部会は、予想に反して、「性・検査時年齢の他、検査実施年度、細胞診実施率、・・・など多くの要因が悪性ないし悪性疑いの発見率に影響を及ぼしている」として、「現時点において、甲状腺検査本格検査（検査2回目）に発見された甲状腺がんと放射線被ばくの間に関連は認められない」としました。しかも、そもそものデータの「地域分け」が、この時から変更されてしまったのです。データを提示する側（福島県）に、なにか都合が悪いことがあるのでしょうか…。

私もこの「地域差」に注目して来ましたので、手掛かりを奪われたように思いました。検査時年齢による罹患率の変化を「隠れ蓑」にして、「地域差は無い」と結論付けられた。そう思われてなりません。正直に言って、苛立たせられてきたのです。

しかし、このブックレットは、福島県側からのデータの提示の仕方を逆手にとって、見事に、こんがらがっていた糸を解いて見せたのでした。一つのグラフを導き出し、そこから「地域差がある」ことを提示したのです。その上で、このブックレットにおいて「原発事故由来の甲状腺がんが発症している」ということを論証してくれました。

2017年3月に『福島甲状腺がんの被ばく発症』（文理閣）を出版した^①。本書はその続編である。

前書で、福島の小児甲状腺がん発症に原発事故が影響していることを主に検査2巡目（1回日本格検査）の解析から示した。原発事故後の甲状腺がんの新規罹患率が避難地域を含む高線量地域（13市町村）で最も高く、次が中通りなどの中線量地域（12市町村）、そしてその次が避難地域以外の浜通りと会津地区の低線量地域（34市町村）であった。罹患率に放射線量に基づく明らかな地域差があったことから、以下の図を示して、福島における小児甲状腺がんの発症に原発事故が影響していると結論した（図1）。

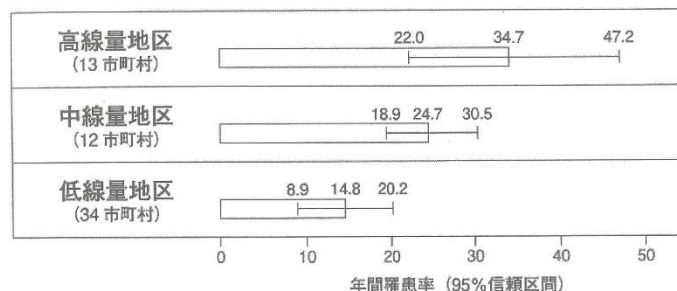


図1 検査2巡目（1回日本格検査）における3地域の小児甲状腺がん年間罹患率

年間罹患率は、1年間で、受診者10万人あたり新たに発症した患者数を表す。図中のバーは95%信頼区間を示す。避難地域の13市町村、中通りの12市町村、その他の地域の34市町村については11ページ表1を参照。

『福島小児甲状腺がんの「通常発症」と「被ばく発症」』
文理閣、2022年、3頁

「日本政府」「学会」「学位」「国連」等、たくさんの「権威」があります。本来はおそらく無条件に信頼すべきそうした「権威」が、こそって信頼を失ったのが「フクシマ原発事故」でした。では、どうするか。オンライン会議では、前ページに参照した私たちの議論を真っ向から批判する議論を伺いました。その議論を経て、「私たちの市民の間に、責任が回って来た」ということを痛感しました。小さな歩みでもいい。弛まずに、学び続けること。間違ってもいい。互いに率直に語り合い聞きあい続けること。そのことの、今、本当に重要であることを、強く知らされたことでした。

以下、会議の様子を報告いたします。

川上

本日は、お忙しいなか、本当にありがとうございます。

私は、東北ヘルプというNPO法人の代表をしています、川上直哉です。皆様には、本当に、あちこちでお世話になっています。今回は特別にお時間を頂き、お集まりいただきました。ありがとうございます。

これまで、私たちは、フクシマ（行政区域としての福島県境内に限定されない、東京電力福島第一発電所爆発事故の影響圏すべて）の現場で、以下のようなことを学び・目の当たりにしてきました。

- 石牟礼道子さん・鶴見俊輔さんたちと、宇井純さんたちの、ほぼ互いを無視し合ってきたように見える、ミナマタのこと。
- 日本学術会議が定め、日本の原子力政策に大きな影響を与えた原子力三原則と、その思想的背景にあった武谷三男さんの科学技術についての考え方。
- 2011年以降に間近で拝見したクリスチャン・山下俊一さんのこと、特に、その人柄へ寄せられる高い評価のこと。

私たちが向き合っているフクシマの現場は、巨大です。それは、「科学」をめぐる人間の営みの複雑さを、そのまま丸ごと学ばなければ、対応できない大きさです。今日は、そうした大切な学びをさせていただきます。どうぞよろしくお願いします。



Mamoru HAYASHI



直哉 川上



井上 儀一



加藤 聡子

会議は、二〇二四年十一月二〇日十一時から
オンライン会議として、行いました。
左上が林さん、左下が井上さん、
右下が加藤さん、右上が川上です。

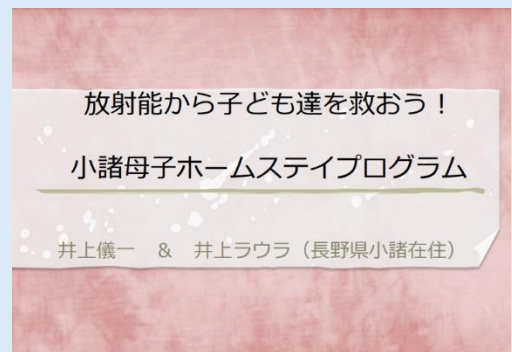
井上さん

井上儀一と申します。長野県の小諸という場所に住んでいます。都会からは遠く離れていますが、今年の夏でもクーラーを必要としない生活ができました。所謂「大企業」で、長く科学技術に直接触れながら働きました。退職後、2011年の原発事故を受けて、「小諸母子ホームステイ」をしました。本当にたくさんの「被ばくに苦しめられている親子」と、大切な時間を過ごしました。

川上

井上さんの支援活動については、新橋ライオンズクラブでの報告会のスライドがインターネットにアップロードされていたので、ここにご紹介しますね。

スライドは、右の QR コードから、あるいは、下記の URL から、ご覧になれます。
https://www.shimbashi-lions.jp/wp-content/uploads/2022/06/komoro_boshi_hsp_01_15P.pdf



加藤さん

奈良に住んでいます。実に、夏は暑い所です。

私は短期大学に勤め、退職後は、それまでの独立研究を続けてきました。

ずいぶん長く、私は「研究をしていていいのか」と考えてきました。「現実問題と離れているのではないか」という問題意識を持っていたのです。「3.11」の出来事に出会い、「こうした問題こそ、すべきことだ」と思い、ずっと考え続けています。勉強を続け、ようやく段々、いろいろな事が分かってきた気がしています。

今は、その「分かってきたこと」を、何とかして、いろいろな方に伝えたい。そう思っています。これは決して「福島の問題」ではないのです。「世界の未来の問題」だと思っています。そう思って、色々なことを、たくさんの方々と協力して、やっているところです。

福島第一原発事故による放射性物質の拡散とその影響について、そこに「地域差はない」という議論が上げられています。そのことを批判する論文を書き、専門誌に投稿したら、本当に稀なことです、それが掲載されました。そこから、「福島原発事故による甲状腺被ばくの真相を明らかにする会」に参加するご縁を頂きました。

今回、私たちが議論するべき「宗川論文」の著者・宗川さんは、この「明らかにする会」の立ち上げから主導された方です。そして、私を含めた会の仲間の多くが、宗川先生の論文に問題を感じました。そして、議論になりました。残念なことに、その議論の途中で、宗川先生が、会を辞めて行かれたのです。それで、私もこの「宗川論文」には責任があるような気がして、反論のコメントを最近作りました。それは、つい先ごろ、雑誌社に送ったのです。これがどのように展開するかは、これからの大切な課題です。

川上

今、加藤さんが「私にも責任があるような気がする」と言われました。
ここに、今日の学びの鍵がある気がしています。

林さん

富山大学で教師をしています。「科学コミュニケーション」等を専門にしています。長く、科学雑誌の編集をし、そして市民活動に関わってきました。水俣病の問題などに向き合い、議論を深めて、取り組むべき課題が明確になるようにと、努力をしてきたのです。

2011 年に原発震災が起こりました。「危ない」と思っていた通りの出来事が起こったのです。それ以来、この問題には、特別な努力を傾注して取り組み、加藤さんと同じく「明らかにする会」に入って議論を続けていました。その時は宗川さんが代表だったと思います。そして、「宗川論文」におかしさを覚え、問題点を見つけ、議論してきました。そして、宗川さんが会をお辞めになる場面も目撃しています。残念な出来事でした。

川上

林さんは、この「宗川さんの出来事」を、科学コミュニケーションの歴史的出来事になぞらえて、印象深い名で呼んでおられますね。

林さん

はい。1995 年に起こった「ソーカル事件」という有名な出来事があります。それは、「無意味な論文」を故意に作成し、それを、当時の思想的潮流の最先端とされていた「ポストモダン」の権威ある専門誌に投稿したところ、それがそのまま受理・掲載された、という事件でした。それは「論文」や「学問」の在り方を深く問う出来事になりました。

ソーカル事件

ソーカル事件とは、ニューヨーク大学物理学教授（専門は統計力学、場の量子論）だったアラン・ソーカル（Alan Sokal、1955年-）が起こした事件。

数学・科学用語を権威付けとしてでたらめに使用した人文評論家を批判するために、同じように、科学用語と数式をちりばめた疑似哲学論文を執筆し、これを著名な評論誌に送ったところ、見事に掲載された事件。

掲載と同時にでたらめな疑似論文であったことを発表し、フランス現代思想系の人文批評への批判の一翼となった。・・・（ウィキペディア）



<https://omg05.exblog.jp/11851961/>

今、宗川（そうかわ）先生が一つの論文を作成し、英文で影響力のある専門誌にそれがそのまま受理・掲載されました。そこには基本的な間違いと、その間違いに基づく実害が被災者に残されかねない、という問題があります。私はこれを「ソーカワ事件」と呼んでいるのです。

川上

なるほど。それでは、具体的に、その問題について、解説をお願いします・・・

以上のようにして始まった会議の概要を、川上は FCC 放射能問題学習会のみなさまに、メールで報告しました。その報告を、以下に転載します。

日付: 2024 年 11 月 21 日(木) 11:43

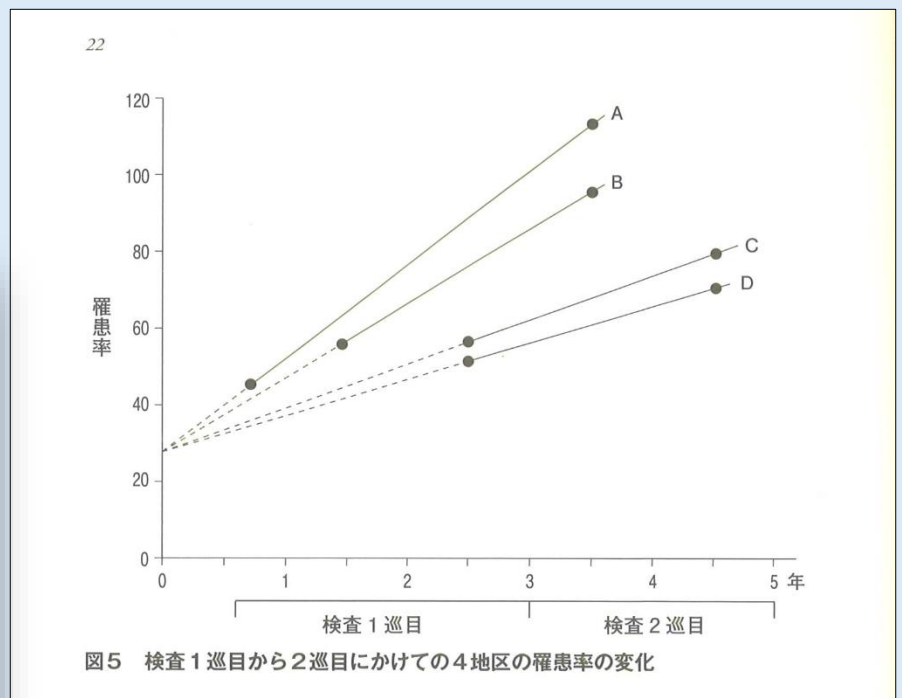
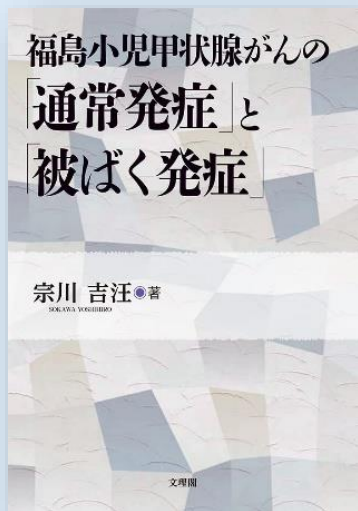
FCC「放射能学習会」にご参加のみなさま

おはようございます。今日が良い日でありますように
表題の件で、素晴らしい学びの時を得ました。

この会合は、本当に学ぶところの多いものでした。以下に、簡単に箇条書きでまとめてみます。

(1) 宗川論文の急所は、『福島小児甲状腺がんの「通常発症」と「被ばく発症」』の 22 頁にあります。

この「図5」の左側で、グラフが
全て一点に交差している部分があり
ます。これが、この論文の
全てを決めるポイントとなります。



「この一点 = 小児甲状腺がん発生率は約 27 人/10 万人」を

「通常発生」とする。そうすることで、

県民健康調査で確認された甲状腺がん患者の「全部が原発由来」でもないし、

「全部がスクリーニング効果」でもない、

という中間地点を取り出せる。

——というのが、「宗川論文」の急所です。

(2)しかし、独特で特異な「スクリーニング効果」説以外の、ほとんど全ての検査では、どうしても、「小児甲状腺がんは約 3 人/100 万人」という結果になっています。従って、宗川論文は、「福島県だけ、通常発症は、他の全ての地域よりも数十倍高い」という事実を受け入れるように迫るものと言えます。しかし、そうすることの不自然は、直感的にも分かることです。

(3)その批判的目をもって宗川論文を読み直すと、データの用い方に、非合理的なものが多く確認されます。そのことを、何人もの研究者が、当の本人に尋ね追求してみたのですが、宗川氏は、意見の違いを理由に、共に学び活動する団体を(それを立ち上げたのは自分自身であるにもかかわらず)退会され、議論は足踏みを余儀なくされた事態に至っているのです。

(4)以上の内容と経緯を確認した私たちは、その意味を考え、議論しました。
そして私たちは、二つの重要な結論を得ました。

- a. 宗川論文を批判検討し、2020 年版の国連 UNSCARE 論文(その紹介は左下の QR コードあるいは <http://tohokuhelp.com/jp/secretariat/33/210927.pdf#page=9> の 8 頁以下)

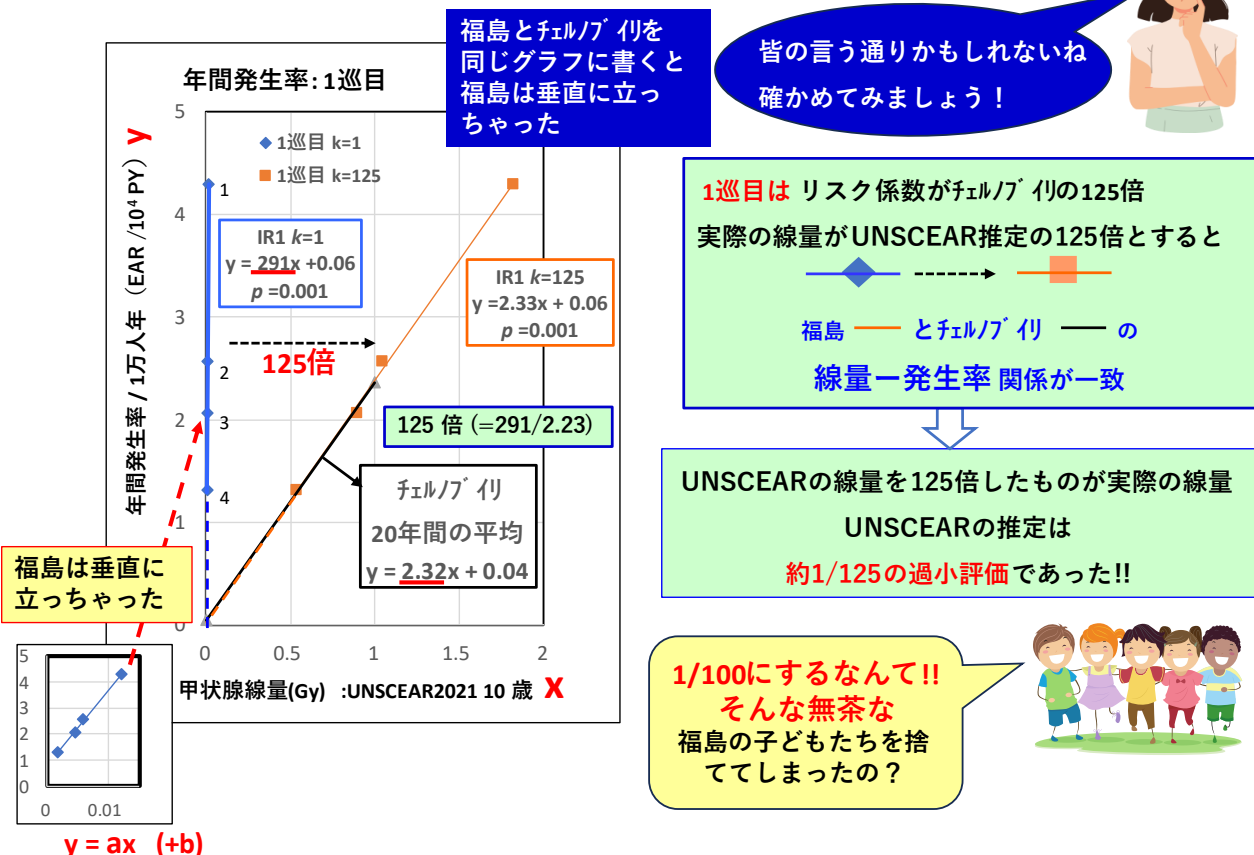


と、福島県民健康調査の成果を、正確に掛け合わせてみると、
国連の被ばく量推定の過小評価が数値化して示され、かつ、
地域ごとの被ばく格差(線量)と小児甲状腺がんの発生率の相関性が
可視化できる、ということ、加藤さんのスライド(右下の QR コードあるいは

<http://natureflow.web.fc2.com/HP/slide/240724KTkantan.pdf>
の 8 枚目・9 枚目)が、見事に示している。これは、
FCC 放射能問題学習会が長く知りたく願ってきた事柄である。

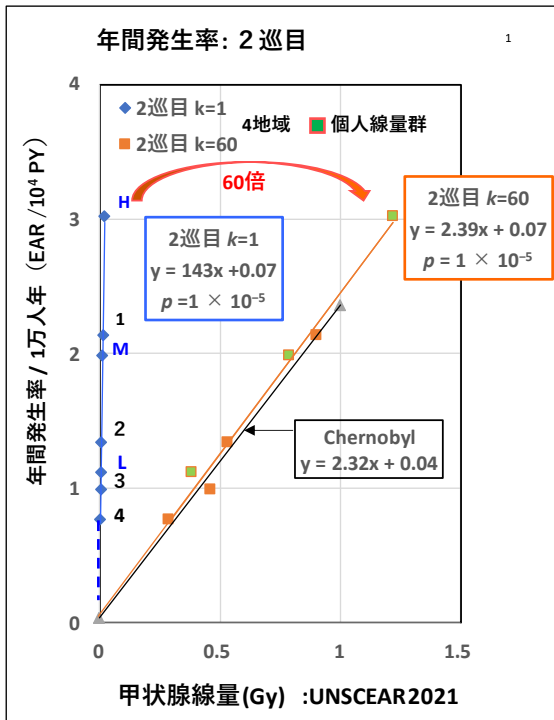


線量反応関係をチェルノブイリと比較する 1巡目



2巡目 福島甲状腺がんの地域線量・
個人線量依存性は 1/60の過小評価を示す

2巡目については地域線量・
個人線量について同じように
調べました。結果は？



絶対リスク係数EAR/Gy(単位省略)
福島: 143 チェルノブイリ: 2.32
比 = 143/2.32 ≒ 60

UNSCEAR推定の線量を
60倍したものが実際の線量
UNSCEARの推定は
約1/60の過小評価であった

福島の実際の線量は何倍か？

k = 60 倍 (=143/2.32)

福島 とチェルノブイリ の
線量-発生率関係が一致

3

b. 宗川論文は、英語の論文誌にも掲載されて、世界に発信されている。これは、「一定の水準を満たした論文誌」に論文が掲載されることで、学者の業績が形成される、という旧来の学問の実績主義に加えて、その「一定の水準の論文誌」のなかで掲載料を支払うことで掲載をするものがあり、それは「査読」なし(あるいは、ごく緩い査読で)掲載される傾向があるので、こうした問題ある論文が世界に発信されることになっている。

ここには、業績主義の弊害が顕わである。それは、研究者が科研費(財源は税金)を取得し、その科研費を吸い取る形で雑誌・出版社が儲かる、という「ハゲタカ」構造が、顕わなのである。

以上の通りであるが、しかし、それだけでは、この議論は終わらない。

査読をきちんとする、という旧来の「一流誌」が、今は、被ばく関連の論文を、ほぼ全て、拒絶している。つまり、アカデミズムの世界が「正しく安全」であるということは、少なくとも原発問題においては、まず、期待できない。そうした中で、なお、本当のこと・真実を世界に発表しようとしたら、「ハゲタカ」であろうと何であろうと、活用しなければならない。

ということは、どういうことか。

ということは、アカデミズムに「査読」を委ね、そこにもたれかかっている怠慢が、もう、市民社会に許されなくなっている、ということである。今、まさに、私たちのような「学習会」の存在価値が大きくなっている。これを深化発展させるために、今回の会合は、非常に意味があった。

7.

以上を踏まえて、井上さんから、最後に、大切な「まとめ」をしていただきました。

次ページの「井上コメント」をご覧ください。

Zoom 会議でのコメント

2024 11/20 井上

- ◆ 私たちの学習会でも UNSCEAR 2020 報告が“福島の子供達の子どもの甲状腺がんの増加が被ばくのせいではなかった”という結論を出していたことに、非常な危機感を持ち、その論拠の検証を行い、“甲状腺がんの増加が被ばくのせいではない”という結論ありきのデータ操作と過小評価と判断しました。
- ◆ 結論ありきのデータ操作と過小評価と判断した内容は、
 - 日本人はヨウ素摂取量が多いので放射性ヨウ素取り込み率を1/2にした。
上記の根拠として UNSCEAR 2020 報告書が参照している論文[K61]は、
“甲状腺への放射性ヨウ素の取り込み率は、ICRP の基準取り込み率 30%に対し、甲状腺が正常に機能している長崎の日本人男性 15 人の平均値が 16.1%±5.4%であった。” という 2 ページの論文です。
 - 建物による空気のろ過を 1/2 にしている(建物に入る空気中の放射性ヨウ素を 1/2 にすること)
“建物による空気のろ過”は実験によったとの記述はありますが、これに関する論文・データ等の情報は、本報告に載っておらず、検証不可。
 - 過小評価した放射性ヨウ素被ばく量から、もっとも感受性の高い原発事故時に 5 歳以下の女子のグループは、最大 50 の放射線起因の生涯甲状腺がんの発症が推定されるが、被ばくがない場合のベースライン数約 650 例に対しては、その不確実性の推定範囲に埋もれてしまい、おそらく識別できないであろう。
これが、子どもの甲状腺がんの増加は被ばくが原因ではないとの論拠になっていますが、これを BEIR-VII のリスクモデルで計算すると、生涯過剰甲状腺がん発生 139 件となり、「識別可能な増加」となります。適用するリスクモデルへの依存性が強いことが分かります。
 - このように、私たちの学習会では、UNSCEAR2020 の“甲状腺がんの増加が被ばくのせいではない”とする論拠は、甲状腺被ばく線量推定の重要パラメータの見直し、根拠の薄い、或いは不明な論拠のもとで行われ、それを元に都合の良いリスクモデルで計算された、結論ありきのものであったと判断しました。
- ◆ 「誰のために・何のために学ぶのか」(川上先生 言)
 - 低線量被ばくの疫学データを元にしたリスク評価体系を当て嵌めること自体に、限界があると考えました。UNSCEAR2020 のように、適当なリスクモデルと恣意的なパラメータを組み合わせれば、いかようにでも都合のよい結論が出せてしまいます。
 - しかし、識別可能な増加かどうかに関わらず、子ども達が被ばくしたことは事実であり、ご家族、お母さん達に、被ばくによる発がんリスクをどのように抑えることができるかをメッセージとして伝えたいということ、私たちの学習会で検討しました。

- そのために疫学から離れ、放射線発癌の生物学的メカニズムの中で、最近のがん幹細胞の研究の中で、特に小児がんの研究についての調査・検討を進めました。詳細は省きますが、以下が学習会で検討したポイントになります。
 - ◇ 成長期の小児は、均等分裂により幹細胞を増やしている状態。被曝により、がん幹細胞が生じやすい。増殖スピードは速い。
 - ◇ 小児がんは、幹細胞に DNA の損傷による突然変異が 2 つ蓄積するだけでがん幹細胞化する。そのため、小児がんは放射線被ばくだけで十分に短期間で発症する。
 - ◇ 小児がんのリスクは、AYA 世代と呼ばれる 30 歳ぐらいまで続く。
 - ◇ 被ばくにより幹細胞に 1 つだけ突然変異が起きた後に、別の要因で突然変異が加わることで、がん細胞化する(被ばく+ α の複合要因)。
 - ◇ 被ばくによる小児がんを発症させないためには、別の発がん要因(喫煙、肥満 etc) を避けることで、被ばくによる発がんリスクを下げることができる(子どもときからのがん予防) => お母さん達へのメッセージ
 - ◇ また、AYA 世代でも小児がん発症リスクは続くので、25 歳時の甲状腺検査を受診することも重要 => お母さん達へのメッセージ
 - ◇ AYA 世代を過ぎ、幹細胞増殖が止まれば(=成長期が終われば)、成人がんのリスクに代わる。成人がんは、幹細胞の突然変異が 5 つ蓄積するとがん幹細胞化するので、小児がんのリスクに対し半減する(子どもが 30 歳になるまで頑張れば一息つける) => お母さん達へのメッセージ
- ◆ 今回の加藤先生たちの活動を知って考えること
 - UNSCEAR 2020 報告書に対し、やはり共通の危機感をもって取り組まれていた仲間がいたことに勇気づけられました。
 - その次に、私たちは「被ばくによる発がんリスクを抑えるがん予防」の方に検討を進め、加藤先生は「福島甲状腺がんが被ばく起因であり、その責任と保証を国と東電に求める」ことに検討を深めていると理解しました。
 - この動きを合わせて考えれば、被ばくによる発がんリスクを抱えた方々のサポートと、既に甲状腺がんを発症してしまった方々のサポートの両方を補完し合えるものと思いました。

- 以上 -

会計報告

2024年9月23日に理事会が行われ、そこで財務報告がなされました。その後、まだ理事会は開催されていません。そこで、以下、9月理事会で報告された財務報告に、9月21日～11月15日の献金報告を添えて会計報告といたします。

多事多難、そして諸般御入用の中、皆様がお寄せ下さいます一件一件の献金に、一つひとつ、尊い祈りが込められていることを思い、心してお預かりしています。いよいよ、大切に活用してまいります。

2024年11月15日 川上直哉 記

- (1) 2024年度は「500万円」の予算として事業を行っているが、現在は収支均衡である。
 (2) 現在、支出削減を進めている。「経常的な支出は月額25万円程度」に抑える目標であった。それは、達成されている。

2024年度				2023年度			
	献金件数	献金額	支出金額		献金件数	献金額	支出金額
4月概算	40	¥433,250	¥692,012	4月	39	¥478,339	¥685,446
5月概算	16	¥200,692	¥298,225	5月	25	¥576,389	¥653,840
6月概算	27	¥653,788	¥329,629	6月	18	¥648,782	¥707,291
7月概算	15	¥276,000	¥203,570	7月	9	¥144,630	¥625,156
8月概算	16	¥165,310	¥270,436	8月	15	¥138,413	¥283,208
9/20まで	6	¥121,000	¥268,803	9月	44	¥645,660	¥558,798
				10月	23	¥410,720	¥296,847
				11月	16	¥191,000	¥291,053
				12月	109	¥921,300	¥284,950
				1月	44	¥485,800	¥736,589
				2月	42	¥439,243	¥523,979
				3月	28	¥460,600	¥312,764
	120	¥1,850,040	¥2,062,675	2023年度決算	412	¥5,540,876	¥5,959,921
前年同月比	80%	70%	59%	前年同月比	85%	84%	85%

進捗率				2024年9月20日現在の資産			
日数	収入(献金のみ)	支出		通帳1	通帳2	郵貯口座	振込口座
47%	37%	41%		¥76,522	¥319,957	¥7,952	¥258,206
	(500万円の予算対比)			合計	¥662,637		

※これは
 ランドセル献金
 ↓
 実際の所持金
 ¥342,680

	4月	5月	6月	7月	8月	9月
移動と会議	¥70,350	¥197,132	¥68,117	¥103,399	¥118,607	¥143,533
書籍	¥10,692	¥16,879	¥8,100	¥24,522	¥15,606	¥36,438
事務費・通信費	¥10,824	¥19,049	¥18,200	¥36,375	¥50,576	¥52,402
合計	¥91,866	¥233,060	¥94,417	¥164,296	¥184,789	¥232,373
月平均	¥166,800					

9月理事会報告 以降の献金	献金 件数	献金額
9月21～30日	4件	¥17,000
10月1～31日	53件	¥345,558
11月1～15日	13件	¥143,612
合計	70件	¥506,170



支援金・献金の受付口座

【郵便振替】

02290-8-136273

特定非営利活動法人

被災支援ネットワーク・東北ヘルプ

【他金融機関からの振込口座】

ゆうちょ銀行 二二九店

当座預金 0136273

発行責任 NPO 法人 被災支援ネットワーク・東北ヘルプ

代 表 川上直哉（日本基督教団石巻栄光教会主任担任教師・

食品放射能計測プロジェクト 共同運営委員会委員長）

理事 吉田隆（日本キリスト改革派甲子園教会牧師・神戸改革派神学校校長）

理事 田中武司（保守バプテスト同盟西多賀聖書バプテスト教会員・財務担当）

理事 中澤竜生（基督聖協団仙台宣教センター国内宣教師）

理事 秋山善久（日本同盟基督教団仙台のぞみ教会牧師・NPO 法人 セミナーレ理事）

理事 阿部頌栄（日本ナザレン教団仙台富沢教会牧師・仙台食品放射能計測所長代行）

理事 木田恵嗣（ミッション東北 郡山キリスト福音教会牧師）

理事 大島博幸（日本バプテスト連盟福島主のあしあとキリスト教会牧師）

理事 李貞妊（元「東北ヘルプ」職員）

監事 本村大輔（救世軍西日本連隊長）

小河義伸（八王子めじろ台バプテスト教会牧師）

※肩書等は全て 2023 年 8 月現在

Sendai Christian Alliance Disaster Relief Network

Touhoku HELP



Per crucem ad lucem（十字架を通過して光へ）

〒980-0012 宮城県仙台市青葉区錦町 1-13-6

TEL/FAX. 022-263-0520 URL : <http://tohokuhelp.com> MAIL : sendai@tohokuhelp.com

携帯電話 090-1373-3652